

宮沢賢治と法華経



宮下 亮善

文学者としての宮沢賢治論は、多くの作家や研究者たちにより紹介されていますが、「法華経の行者」としての評価はあまり語られていないようである。敢えて批判を覚悟して言わせていただければ、賢治は「法華経の行者」として「常不軽菩薩」のように生きたいと願った三十七年間の生涯ではなかったかと、私には思われてならない。

それは、父・政次郎に『国訳法華経一千巻』を知己にあげてくださいと遺言し、その経の後ろに「私の生涯の仕事は、この経をあなたの元に届け、仏意に触れて、あなたが無上道に入られますことを」と書いてくださいと頼

むことからして、尋常ならざる法華経への傾倒が読み取られるからである。

その「常不軽菩薩」とはどのような菩薩なのかということを説かねばなりません。法華経の『常不軽菩薩品第二十』に説かれている菩薩です。

会う人ごとに礼拝して、「私はあなたがたを心から敬います。けっして軽蔑しません。それはなぜかと申せば、あなたがたは菩薩の修行をして、未来に仏になるかたがたであるからです。」といって、拝み廻って歩く菩薩のことです。

廻りの人々は、この菩薩の真意を理解せず、かえって怒り、石を投げつけたり、罵詈雑言を浴びせかけて非難するわけでありますが、この菩薩はまったく意に介することもなく「私はあなたがたを心から敬います。けっして軽蔑しません。」と、同じことを繰り返し

繰り返し何年も歩き廻っていました。

そうこうするうちに「あなたがたを常に軽んじません」といったところから「常不軽」というあだ名をつけられて呼ばれるようになった菩薩である。

——ヒデリノトキハナミダヲナガシ

サムサノナツハオロオロアルキ

ミンナニデクノボートヨバレ

ホメラレモセズ

クニモサレズ

サウイフモノニ

ワタシハナリタイ——

この心境は常不軽菩薩の心に通じるものがある。

比叡山の「千日回峰行」も、この常不軽菩薩の「礼拝行」の実践行ともいわれており、山中の神や仏や草も木にも、それこそ拝み倒して行く修行である。



宮沢賢治 (1896~1933年)

『法華経』とは、所謂、大乘仏教の王経ともいわれ、利他救済の立場から広く一切衆生の平等と成仏の菩薩乗を説き、それが仏の教えの真の大道であるとする教えである。大乘とは、「大きな乗り物」の意で、全ての衆生が手に手を取り合って彼岸へ渡ろうという意であり、菩薩乗とは、『上求菩提下化衆生』つまり、上に悟りをもとめ、下に衆生を済度するという位の意である。その法華経如来寿量品に『不自惜身命』とあるが、自らの身命を惜

しまずに他のために利するものこそ、法華經の行者であり、実践者であるといふのである。法華經とは、行動の哲学であるといえる。

東ニ病氣ノコドモアレバ

行ツテ看病シテヤリ

西ニツカレタ母アラバ

行ツテソノ稲ノ束ヲ負ヒ

南ニ死ニサウナ人アレバ

行ツテコワガラナクテモイトイヒ

北ニケンクワヤソシヨウガアレバ

ツマラナイカラヤメロトイヒ

行ツテ、行ツテ、行ツテ、行ツテ 賢治は自らの人生の行動指針を法華經に求めたものと考えられる。

『農民芸術概論綱要』に、世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はありえない、自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する。この方向は古い聖者の踏み

た教えではないか、新たな時代は世界が一つの意識になり生物となる方向にある。正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである。われらは世界のままことの幸福を索ねよう、求道すでに道である。自我の意識が宇宙意識まで進化するのは、古い聖者の教えたもうた道、すなわち釈迦の教えということであり、法界成仏のことである。まさに、仏とは宇宙の真理を会得した人々のことで、銀河まで開かれた自我意識はおのずから世界全体の幸福を考えるようになる。そのことが自我の必然的進化である。と述べている。『種山ヶ原』に、雲が風と水と虚空と光と核の塵とで成り立つとき、風も、水も、地殻も、また、わたくしも、それとひとしく組成され、じつに、わたくしは水や風やそれらの核の一部分で、それを、わたくしが感ずることは、水や光や風ぜんたいが、わ



日輪と山（賢治画）

たくしなのだ。―自然をはじめすべてのものを自分自身と見ている。あらゆるものが宇宙の法則の中であり、法則に従っており、あらゆるものが、人も、自然も平等だ―

これらの二編からも、大乘仏教的思惟《法華経的》をみることができる。

そもそも、賢治と法華経との出会いは、大正三年十八歳の時、父・政次郎から『漢和対照 妙法蓮華経』を贈られたのが機縁となったもので、生涯の信仰となった。

宮沢家は代々の浄土真宗の熱心な門徒であり、父・政次郎は聞法会などを開き、浄土真宗に限らず他の宗派や宗教、哲学、古典など広く学んでいた。このような、家庭環境の中で育ち後々の賢治に影響を与えない筈がありません。しかし、熱心な浄土真宗の家庭に育ちながら、なぜ、法華経に傾倒し改宗したのでしょうか、父の開く聞法会にも参加し、『教行信証』『歎異抄』など学び親鸞の説く「他力本願」の教えも十分に理解していたと考えられます。また、親鸞自身も九歳で出家し、比叡山に登り「千日回峰行」など厳しい修行にも耐えながら、二十九歳の時、京都六角堂に百日参籠し、救世観音の「夢告」により、比

叡山を後にしたことも知っていた筈である。

あの有名な《善人なほもて往生す、いはんや悪人おや》所謂、『悪人正機』親鸞の念仏思想の真髄にも触れていたものと思われます。

宮沢家の稼業は商家ではあったが、質・古着商を営んでいたということが、幼き賢治に影響を与えたものと思われます。当時の東北地方は冷害の影響で、飢饉や凶作のために農家は食うや食わずの中、口減らしのため娘を苦海に沈める惨状であった。このような、貧しい人々の姿をわが家の店先で見聞きする賢治の気持ちはいかばかりであったことでしょうか、そのことが賢治の心の奥底に重くのかかったことは容易に推察されます。

「燃ゆる信仰から精進の一路へ

高農を優等で卒業した宮沢賢治君

聖日蓮生誕七百年の思いで深き日に

剃髪して深夜漂然 家出す」

大正十年三月六日の岩手日報に、掲載された記事である。父・政次郎との信仰上の相違が原因であった。

その信仰上の相違とは、親鸞の説く《易行門―他力念仏「易」を水路の乗船》と法華経の説く《聖道門―自力修行「難」を陸路の歩行》との見解の相違であったと思われます。

親鸞の比叡山との決別の大きな理由は、自ら悟りを求め厳しい修行に明け暮れても、その煩惱妄想を断ち切ることができずに苦行を捨てざるを得なかったことであり、親鸞の苦悩は古くて常に新しい根源的な問題を今もなお投げかけている。《妻帯の決心》「祈ることで悟りを得ることのできない愚かな人間であるとし、自らを愚禿親鸞とさげすみ」唯々、阿弥陀の救いを願う「他力本願」の教義を確立した。

賢治は大正九年二十四歳の時、法華経系の

宗教団体「国柱会」に入会した。「農家は鋤鋤をもつて、商人は算盤をもつて、文学者はペンをもつて、各々、その人に適した道において法華経を身に読み、世に弘むるというのが、末法における法華経の正しい修行の在り方である」と、国柱会理事の高知尾師に教化され、文学創作活動と信仰を結びつける賢治の創作活動が弘まることになる。

「童子こさえる代わりに書いた」

賢治の童話創作への傾倒さが想像される。

法華経は一切の衆生は仏になると説く教えでもあるが、現実の諸々の社会の苦悩の解決にも積極的にかかわり、その救済のためには身命を賭けても尽くせよという教えでもあれば、賢治にとつては、目の前に苦悩する人々を看過できないものがあり、その心境が法華経の教えに共感を覚えたものと理解できる。

それは、病の床にあつても農業指導の相談

者がそれとは知らずに訪れても、病を押しても相談に応じている姿からでも伺える。

悪事は己に向かえ、好事は他に与え、己を忘れて他を利用する。賢治は文学を通じて、法華経の行者として、菩薩者でありたいと生き抜いた人であった。

「ねがわくは 妙法如来 正遍知

大師のみ旨 成らしめたまえ」

妙法如来、正遍知、いずれも悟りの世界です。伝教大師の説く悟りの仏の世界が、この世に満ち溢れているようにと願った詩です。比叡山にこの詩を遺している。

法名―真金院三不日賢善男子

真金とは釈迦の事、三不とは三毒(貪・

瞋・痴)を犯さずの意。

昭和八年九月二十一日没 享年三十七歳

(天台宗大雄山 南泉院住職)